

## 第2部「自動車の自動運転がもたらす未来

### ～その課題と社会的影響～

コーディネーター

高橋 進(西 23 期) 日本総合研究所 チェアマン・エメリタス

2020年の自動車の自動運転実用化を巡って、各社、各国がしのぎを削り、様々な方式、場所での実証実験も活発化しています。しかし、技術的な問題だけでなく、法的な規制も含め、まだまだ解決すべき課題は多そうです。他方、自動運転は、高速道路での自動運転だけでなく、高齢者の移動のラスト・ワンマイル対策や、夜間などの宅配便の配送など、社会の様々な側面から、そのメリットを考えてみるのが、有益ではないでしょうか。

パネリスト

上田 進朗(西 21 期) 慶応義塾保険学会 常務理事

モータリゼーションは多大の利便性をもたらしましたが、『交通戦争』に代表される負の社会的要素も拡大し、それらへの対応の影響は、更にあらゆる分野に波及していきました。

保険業界においても例外ではなく、特に損保業界においては、正に『新種保険』であった『自動車保険』が業界の中心となって、今日の隆盛を見るに至っています。

自動運転車で社会はどう変わっていくのか、『保険』を通して考えてみます。

津雲 淳(西 23 期) 元 NEC 中央研究所 パターン認識研究部長

自動運転には運転支援から自律運転まで何段階かのレベルがあります。自律運転のレベルだと、自動車が感覚(視覚・聴覚)と知能を保有することになると思います。

感覚と知能を保有するための技術とはどのようなものか？それを実証するためには何をすればよいか？その後、自動運転は技術にどのような影響を与えていくのか？

情報通信技術の視点から自動運転とその未来について考えてみたいと思います。

沼上 志保 前都立西高 PTA 広報部長

自動運転への期待は、様々ありますが、より安全に、安心して目的地まで移動できることは、車を利用する多くの人が望むことだと思います。近年、自動運転に近づいていることを感じさせる様々な機能が増えていることをいろいろな場面で実感しています。これまで、子育て・介護等において車に助けられてきましたが、生活必需品として車を運転してきた立場から自動運転の未来を考えることができたらと思います。

小田 智子(西 37 期) 東京都トライアスロン連合 理事

私は自動車の運転が好きです。人間が行っている運転は「認識(認知)、判断、操作」の3つの技能を必要とするスポーツの一種と捉えていました。この点からは自動運転が普及することに対して「好きなものの魅力が少なくなる」様で、積極的に受け入れていませんでした。しかし、あと数年で自動運転時代が到来し、生活もビジネスも大きく変わると言われています。自動運転により、安全性が高まり、今まで運転ができなかった方々にも運転が可能になるならば、自分の認識を方向転換する時期かもしれません。「自動運転が都市部で普及するようになると自動車は個人の資産ではなく都市部のインフラの一部になる？」そんな日を自分の目で見る事が出来るでしょうか？様々な可能性について考えていきたいと思います。

井上 眞(西 46 期) トヨタ自動車 MS 車両性能開発部

環境に優しく、安全で快適、運転が楽しい！そんなクルマを提供したいと思いながら、車両開発に携わっております。自動運転は、運転好きの人が高齢になっても安全に運転を楽しめたり、身体の不自由な人も自分の車で移動できたり、より多くの方が Fun to Drive を感じられる技術だと思います。

東京オリンピックが開かれる2020年や更に先の将来、自動運転技術とモビリティ社会がどこまで進歩しているか、私も楽しみです。